

我らが母校

北海道札幌拓北高等学校

拓北高校は昭和63年に道立の普通科高校として誕生し、これまで約8,317人の卒業生を送り出してきました。開校当初は住宅もまだ少なく、職員室からあいの里公園駅が見渡せたということです。

徐々に住宅も増え、最も多い時期で生徒数は1,287名を数えましたが、再編統合により平成27年3月をもって閉校することとなりました。取材をした平成26年12月の時点では3年生269名のみが在籍し、広々としたキャンパスは少し寂しさをたたえていました。

同校の在學生に学校の印象を聞くと、「自然環境に恵まれている」「落ち着いて勉強が出来る」「身内だけでなく地域の人ともつながりがある」など、この学校、そして地域に心から愛着を持っていることが感じられました。

同校は地域に信頼される学校を目指してこれまで様々な活動をしてきました。本稿ではその活動の一端をご紹介します。

(本稿は地域振興課が、H26.12に取材・編集したものです)



【生徒会執行部の取り組み】

生徒会執行部は現在3年生14名で活動しています。生徒会は同校で開催される生徒総会やイベントの運営を行っていますが、平成26年度は学年が一つしかないため、どのイベントも昨年度の焼き直しでは対応することが出来ず、ゼロベースで企画を考えるとこから始まります。顧問の先生か

らは「仕事の量は例年の2倍」とのこと。とても忙しい毎日を送っています。

そんな執行部の皆さんが、これまでに行ってきた活動の中で最も思い出に残っているのは、同校の一大イベント「拓高祭」。拓高祭は7月に開催される同校の学校祭で、金曜と土曜の2日間にわたって行われます。

イベントの企画は執行部が中心となって4月から計画を立て始め、仕事の割り振りや各担当との打合せなどを重ね、当日に臨みました。今年度が最後ということもあり、当日は同イベントを惜しむ地域住民と保護者約800名が会場に集まり、生徒とともに会場を盛り上げました。また、SNSで呼びかけて集まったOB・OGが食堂を運営したり、PTAが焼鳥の販売をするなどして同イベントに花を添えました。まさに地域と学校が一体となったイベントは大盛況のうちに幕を閉じました。



取材に答えてくれた執行部の部員→

この他、生徒会では多くのイベントの企画や運営を行っており、取材に訪れた12月も閉校記念式典の準備の真っ最中。1年を通して忙しく活動する代表に感想を聞いたところ「生徒の中心となってイベントを運営するのは本当に大変でした。でも、今ではそれが自分の糧となり心の支えとなっています」との言葉をいただきました。

【ボランティア局の取り組み】

同校にボランティア局が出来たのは今から10年ほど前のことです。もともとは自主的にボランティア活動を行っていた弓道部などの有志が、「もっと積極的に活動したい」と、学校側に働きかけて出来たという経緯があります。現在は在籍する8名のうち、女子生徒が7名という男女比ですが、「力作が多くて大変じゃない」との質問には「力の強い女子が多いので」とのこと。「拓北魂」を感じずにはられません。

さて、さまざまなボランティア活動を行っている同局ですが、特筆すべきものは、あいの里児童会館で行われている「ちょボラ活動」（ちょこっとボランティアの略）への参加です。この活動は、児童会館のボランティアと一緒に使用済みの割り箸を回収し、再生工場に送りティッシュの材料とするもので、児童との交流を深めるとともに資源のリサイクルにもつながる取り組みとなっています。児童会館との連携は、あいい祭りでの児童会館ブースの運営協力にもつながっており、地域の一員として各方面で活躍するきっかけとなっています。



↑あいい祭りの様子

取材に答えてくれたボランティア局員→

この他にもユネスコの「世界寺子屋運動」を支援する街頭募金や地域のゴミ拾い・除雪など数多くの活動に参加してきた局員からは、「住民の方より密に過ごすことができ、地域への愛着を深めることが出来ました」「地域の方から『今年もありがとう』と声をかけていただき、感謝されることの嬉しさを知りました」との感想をいただきました。

【藍染部の活動】

同校1階の廊下を奥に進んでいくと、天井から藍染の作品が顔を覗かせます。染液の独特のにおいが鼻を付くこの先に、藍染部の部室「藍染室」があります。

全国でも珍しい「藍染部」は同校開校にあたり、当時の校長先生の「あいの里」という地名に因んだ特色ある学校にしたい」との思いから生まれた部活です。部員数がたった1名になった時期もあったそうですが、先生たちのフォローや生徒の熱心な活動により、今日まで伝統の灯を絶やさずに続いています。

活動内容はいたってシンプルで、主にハンカチを染めること。しかしながら、江戸時代から伝わる製法で藍染を行う同部では、液を染められる状態にする「藍立て」も生徒が自らの手で行います。これがとても大変で、熱さや匂いと戦いながらの作業となります。苦勞して作った液で作品を染める瞬間は、感慨深い違いありません。また、輪ゴムや糸で付けた模様は自分でも予想外のものとなり、また一つとない作品を生み出すことが出来ることも魅力の一つのことでした。



藍染部の活動（染色の様子）

この他、PTA 研修会の一環である藍染体験会では、生徒が講師役を務め、毎年好評を博しています。ALT（外国語指導助手）が参加したこともあり、英語での説明に苦勞しながらも藍染を楽しんでもらうことが出来たということです。

部員の方にお話を聞くと、もともとはそれほど藍染に興味がある人ばかりではなかったそうです。しかし、部活動を通して「地域の伝統を知ることができ、あいの里を知るきっかけになった」「仲間とともにものを作る楽しさを知ることが出来た」と充実した笑顔で答えてもらうことが出来ました。

4. 連携・連帯でつくるまちづくり



取材に答えてくれた藍染部の皆さん。自分の作品とともに。

【理科学研究部の活動】

トンネウス沼に代表される豊かな自然に恵まれた環境を生かし、輝かしい成績を収めてきたのが同校の理科学研究部です。開校2年目に同好会として発足した同部は、部に昇格後、研究発表大会などで数多くの表彰を受けるとともに、地域の方々をはじめ多くの人に研究成果を知らせる活動を行ってきました。地域のNPO法人「カラカネイトトンボを守る会」の活動にも参加し、トンネウス沼の環境保全やカワセミの営巣場所の整備、ビオトープの草刈りなどに協力してきました。

そんな同部が最近力を入れているのが、かつてあいの里地域に多く生息していたホタルの定着活動です。現在も成虫が見られる南あいの里に成虫を数えに行き、その環境を調査、あいの里公園の「ホタル池」に似た環境を作り出し定着を図るというものです。

その活動の一環として行われ、地域に大変親しまれてきたのが6月の「放流会」と7月の「光観察会」です。放流会は、同部が1年間飼育したホタルの幼虫をあいの里東小学校の生徒とともに放流するもので、光観察会はそのホタルの光を実際に見に行くものです。いずれも地域行事として根付いており、観察会には約180人ほどの参加者が訪れたとのこと。

このように、同部では、校舎内での研究のみならず、多くの地域住民との交流も行っています。



放流会



光観察会（理科学研究部による説明）

顧問の先生が「ホタルの先生」として地域の子どもたちに親しまれていることもその一つの証拠でしょう。

同部の部員の方も、自然に詳しくなったことはもちろん「人と多く接することで自分に自信が持てた」ことを所属した感想として挙げてくれました。また、「高校で培った経験を生かして、将来は生物の特性を活かしたものづくりの仕事につきたい！」との夢も語ってくれました。



取材に答えてくれた理科学研究部の皆さん。